『まんじ』90 号(2003.11)

散策中に思う・韓国にて

新井　宏

平成十三年の初めから、韓国の国立慶尚大学で金属工学を教えながら、趣味の古代史や考古学の研究を続けている。その間に韓国を散策しながら思ったことを『まんじ』に四編ほど書いているが、その内の二編は、私の趣味の研究が大進展した事情を自己陶酔しながら謳い上げたものである。頁数の関係で一部割愛して載せたい。

誤解から始まる（平成十四年五月）

今度のドラマもまたいつものように誤解から始まった。

奈良に似通う新羅千年の王都慶州は四方を山に囲まれた小さな盆地にある。その中央部の南側に位置する半月城は東西千メートル程に三日月状に拡がった台地で、四周に堀を廻らせ、内部に王宮があったと伝えている。慶州を散策するときには、ここに立ち寄ってから帰るのを習慣とし

ていた。その日も朝から佛国寺と石屈庵を歩きまわり、足裏にはまめが出来始めていたが、散策の仕上げのつもりで、慶州国立博物館の側から道のないところを半月城によじ登った。半月城の外周部は二重、三重、四重の木立になっているが、内部は広場になっていて、初夏の陽射しが照りつけていた。日陰を求めてちょっと歩き難いが木立の中の瓦礫石を伝い歩いている内に突然ひらめいた。

たしか尹武炳の論文にここから見下ろす南北路のあたりに新羅王京の朱雀大路があり、その幅が百二十メートルだと報告されていたはずだと。それなら大変なことになる。三十年来の私の学説が『三国史記』の古文書で検証されることになる。

……今頃こんなところをのんびり散歩している場合か……すぐに資料に当って見なければ……でも資料の多くは日本に置いてある……それなら金海空港に直行しようか……いやもう今日の飛行便はない……韓国の大學の図書館にだって資料があるはずだ……。

私は永年にわたって、古代の朝鮮半島と日本に共通する古韓尺と名づける二十六・七センチの尺度が存在していたことを主張し続けている。研究論文も多数書き、研究書も出版している。その結果、一部の学者には積極的に認められ、韓国ではその本の海賊版が出ているほどであるが、世の中の常で従来学説とぶつかるところもあるため、無視し続けている学者も多い。それは、私の学説が主として考古学的な遺構とか遺物などの間接的な状況証拠に依存していて、古文献の裏づけなど直接的な証拠に乏しいためである。

『まんじ』90 号(2003.11)

……決定的な証拠がない限り、従来学説に忠実にしていれば間違いはない……第一いままでに従来学説に則って多くの論文を書いてしまっている……アマチュアの学説にうっかり乗っかって笑いものになったら大変だ……。そんな声が聞えて来るようであった。

だから、私の学説が『三国史記』の記事で裏付けられれば、仮説が定説になる。はやる気持を抑えきれない。かくして、今度のドラマも突然のひらめきで始まった。

しかしそれが誤解であったことが間もなく判明する。美しい誤解はいつも醜い現実によって覆される。

突然のひらめきとはこういうことであった。

慶州には昔から方格地割が残っていて、この方格の単位が約百六十ートルだとする説が考古学的な調査が進むにつれてますます確実になってきた。その事実と朱雀大路が百二十メートルであることを組み合わせると『三国史記』の「王都、長三千七十五歩、廣三千十七歩、三十五里、六部」という記事がうまく説明できるのである。

すなわち「王都長三千七十五歩」の記載は王京が百歩単位の方格に区切られ、中央に七十五歩の朱雀大路を持っていたことを意味しているのではないか。それならば、百歩が百六十メートルで、七十五歩が百二十メートルに対応し、一歩は百六十センチ、一尺は二十六・七センチと計算される。それは、遺構から求めた古韓尺そのものの長さに他ならぬではないか。……もう間違いない……。

はやる気持で次の文章を見れば、「廣三千十七歩」とある。この十七歩すなわち百尺は古韓尺で計算すれば二十六・七メートルで、これも今までに発掘された古代道路幅の十三・四メートルのちょうど二路分である。ますます確実だ。高揚する気持を抑えきれない。

しかしこの美しい誤解は成立たなかった。百二十メートルの朱雀大路が存在していたとする尹武炳の学説が、その後の発掘調査で否定されていたからである。それに良く見れば、「長三千七十五歩」とは王京の長さを南北に測った時のことで、東西に走る朱雀大路がその長さに含まれるはずがない。その上、私の見た『三国史記』にミスプリントがあり、「広三千十七歩」は「広三千十八歩」の誤りであった。

単に夢から醒めただけなのに虚脱感が漂う。

……それにしても良い線を行っていたのに……発掘調査の理解が間違えているのではないか……長を幅の意味で使った例だって探してみればどこかにあるのではないか……。失ったものが大きかっただけにいつまでたっても夢から立ち去りがたかった。

しかし私には確信に似たものがあった。かっても誤解から始まって深い失意を味わいながら、もっともっと厚みのある着想に至ったことが何回もあったではないか。平坦な道で得た着想には深みがないが、挫折の後に得た着想には何人も到達しえない豊かさがあるではないか。

そして間もなく本当にもっと素晴らしい夢を見ることになる。美しい誤解が醜い現実に覆され

た挫折の後に、想像もしていなかったほどの広々とした世界が拡がっていたのである。

心がふたたび高揚するが、いまは伝える言葉を知らない。この感動を伝えるには、ただただ自己の研究遍歴を語るしかあるまい。

ものさしの研究というニッチな世界に目を向けるきっかけとなったのは、森浩一の岩波新書『古墳の話』を読んだ昭和五十年頃のことである。そこに出ている古墳の大きさとものさしの関係に釘付けとなってしまった。古墳の大きさを測ると中国の晋尺（二十四センチ程度）で完尺を得ると言うのである。

そして古墳の一覧表を眺めている内に誤解が始まった。数字を見る限り、晋尺よりももっときれいに当てはまる尺度があるではないか。なぜ著者はそんな簡単なことに気付かないのだろう。私ならもっと合理的な方法で最も良く当てはまる尺度を求める方法を知っている。それは統計学とそれに基くコンピュータ計算ではないか。私の出番がやってきたのではないか……。折から、コンピュータが一般企業にも普及しはじめていた。

しかし、着想自体は優れていて誤解とばかりは言えなかったが、古墳の大きさが規則正しく山来ていると思ったのがそもそも間違いであった。第一、文献によって古墳の大きさがかなり違うし、どこを起点に測った数値かもわからない。無数にある古墳のどれを対象にすべきかも大きな問題であった。数学的な解析方法は開発できたが、肝心の古墳のデータはとても明解に尺度を語るにはほど遠かった。いくら試行錯誤して見ても満足行く結果は得られない。

折から専門の学者を含めて、古墳の設計や尺度について多くの学説が出され始めていた。しか

し、どのアプローチも主観的、恣意的に過ぎていて納得の行くものではない。一日も早く自説を発表したいと思いながらも、すっかり行き詰まってしまった。ただただ、いつの日にかコンピュータを使った解析方法が脚光をあびることを信じて、余暇を見つけては全国の古墳の計測図面を集め続けていた。しかし四十歳代のサラリーマンが自分だけの時間を持ち続けることは難しく、いつのまにか情熱も醒めてしまった。

それからちょうど十年近くたった昭和五十八年のことであった。仕事上で責任を取る形で研究部門を担当することになった。左遷の意味が込められていた。

しかし、この職場が私の人生に幸運を呼び込こむきっかけとなった。美しい誤解が醜い現実に覆され、そしてもっと大きな夢を育む。そんな研究の世界がよほど体質にあっていたらしい。ヒットが出始めた。

そして仕事上で博士号を必要とするというので、取り組んでいた研究で、全く期待もしていなかったような理論を編み出すことに成功した。神仏を信じない私が神仏の加護を感じた瞬間であった。

仕事が再び順調にまわりはじめ、精神的に多少の余裕が持てるようになり平成と年号が変わる頃から、また尺度の研究を再開しようという気持が高まった。

ひとつの突破口となったのが、古墳ばかりでなく、古代宮殿や古代寺院にも目を向けることであった。そこで出会ったのが、かの有名な「法隆寺再建・非再建論争」である。

実は、この大論争も一部の学者の美しい誤解が始まりであった。『日本書紀』には天智九年（六七〇）に「一屋あますことなく焼失」と書いてあるにもかかわらず、建築学者の関野貞が明治三十八年これを推古朝すなわち飛鳥時代の建築であるとして「非再建論」を唱えたのである。それは様式論からすれば尤もな主張であった。どう見ても唐の文化が大量に流入した白鳳時代以降にこのような古風な建物が建てられるはずが無かったからである。

この関野貞の「非再建説」は日露戦争で高揚したナショナリズム的な世論に熱烈に受け入れられた。例え再建であったとしても世界で最も古い木造建築であることには変わりがないが、国民感情としてはもっと古くなければならなかった。聖徳太子の創建した寺そのものでなければならなかった。

これを強力に支えたのが美術史家の平子鐸嶺であった。古籍に通じるこの新進気鋭の平子は様式論とともに史学の面からも「非再建論」を次々に立証した。あたかも「非再建論」が完全に受け入れられたかの様相を呈した。

これにびっくりしたのが文献史家達であった。すくなくとも大化以降の書紀の記述には信を置く彼らにとって、書紀の書かれるわずか六十年前の出来事が間違いであって良いはずがない。それまで一度も法隆寺を訪れたこともなかった若き日の喜田貞吉が「非再建論」に戸惑う恩師小杉温邨に代わってするどい反論の筆をとる。これが大論争の始まりであった。

この誰にでも判る「燃えたか燃えなかったか」と言うテーマは、専門学者ばかりでなく、多く

の歴史ファンを惹き付け、以降三十年以上に渡って延々と繰り広げられることになった。

しかし昭和十四年に実施された若草伽藍の発掘調査により、この問題は突然幕が下ろされてしまう。若草伽藍の一部が、法隆寺西院伽藍の一部に重なっており、「非再建説」が成り立たないことが判明したからである。美しい誤解は醜い現実によって覆されてしまった。

ところでこの論争において、非再建論者が一貫して主張したのは、法隆寺が高麗尺（三十五・五センチ程度）により造られているという点であった。それは、法隆寺の建物を詳細に測ればすぐに判ることであるが、この建物が七世紀中頃以降の公式尺すなわち唐尺（二十九・七センチ程度）で作られたとは到底信じられなかったからである。ここに高麗尺が華々しく登場した。

もっともその頃、高麗尺と言う尺度の証拠があったわけではない。平安時代の書『令集解』や『政事要略』に、それらしき記事があり、大化以前に唐尺より二割長いものさしが存在していたと考えられることと、それが中国の東魏尺に近いことが最大の根拠であった。そして高麗尺を、法隆寺の建物に当てはめて見たところ唐尺よりも良く合ったのである。

たしかに有力な論拠であった。しかし法隆寺が高麗尺すなわち東魏尺で作られたと言う説も今となってみると美しい誤解であった。

それは東魏尺が唐尺の二割増しではなく、唐尺と同じ程度の三十センチであることが今の中国では定説となってしまったからである。

しかし一度信認を得た東魏尺は、日本や韓国の学者たちを惹きつけ、未だ東魏尺に基く考察が

相次いで行われている。旧石器捏造に乗って大合唱をしていた考古学界と同じ構造で、皆で渡れば恐くない。

法隆寺建築に高麗尺を当てはめて見ると良く合う場合があることは確かであった。しかし全てがうまく合っている訳でもなかった。高麗尺に捉われなければもっと良く合う尺度がある。それが古韓尺である。古韓尺なら建物細部にいたるまで実に良く一致するのである。しかし古韓尺などと言う記録はどこにも無いし、法隆寺にだけ適合してもそのことだけでは誰も認めるはずがなかった。

それからは夢中になって古代寺院の寸法を渉猟した。そして法起寺も法輪寺も古韓尺に良く合っていることを知った。しかしまだまだ不十分だ。そして発掘調査に目を向けると日本最初の寺院、飛鳥寺遺蹟も古韓尺に良く合っている。その他の飛鳥・白鳳寺院遺蹟も正確な寸法を得ることができなったけれど、古韓尺なら矛盾がない。古墳の研究とも良く整合する。ますます確信が深まる。

しかし、尺度問題の恐いところは「そう思って見るとそう思える」ところにあった。恣意的な解釈なら誰にでもできる。誰でも納得できる客観的な判定基準でなければ、いわば水掛け論に終わってしまう。これを如何にして乗り越えるか。そして想い至ったのが古墳の尺度を論じる時に開発した統計学利用によるコンピュータ解析法であった。しかもかってはコンピュータを個人で使うことなどなかなか望めなかったが、パソコンが簡単に使える時代が始まっていた。

例え不正確であっても数多くのデータを解析すれば真の姿が浮かび上がってくる。それが統計学の教えるところである。法隆寺のように品質の良い測定値はこれからはいくら望んでも簡単に手に入る訳ではない。しかし、不正確で良ければいくらでもデータはあるではないか。発掘調査報告書を求めて国会図書館通いが始まった。そして当然の帰趨として朝鮮半島にも目が行った。

時が熟していた。この頃から韓国では古代寺院の学術調査がいわば国の威信をかけた形で行われ始めていた。その中でも慶州の皇龍寺跡の調査は絶好な資料を提供してくれた。東大寺を凌ぐこの巨大寺院跡には、礎石を残した九重塔、金堂、講堂や廻廊が残っていたからである。そして古墳や宮殿、寺院の膨大なデータが手元に集まった。さあどうやって料理するか。

とにかくデータをコンピュータで解析し、その結果を時代・地域別に並べて見ることにした。そして驚いた。古韓尺が色濃く浮かび上がってきたのである。

いつのまにか五十路に入り、相変わらず仕事と格闘する日々であった。時間の余裕があるはずがなかった。しかしサラリーマン生活にも波があり、失意を味合う時に、あたかも代償を求めるかのように夢中になって論文を書き始めた。心の中では、博士論文の時の「柳の下の泥鰌」を再び狙っていたのかも知れない。書き出しは順調であった。

しかしそんな時に限って、仕事が順調に回りはじめ、時間が足りなくなる。朝早く起きて書き進めるしかなかった。もう勢いは止められない。それが例え美しい誤解であっても、もう後ろ戻

『まんじ』90 号(2003.11)

りはできなかった。そして三篇の論文を書き終えて、それをもとにして『まぼろしの古代尺』という研究書を脱稿したのが、平成四年のことである。

もともと本として出版することが前提であった。地味な研究誌にアマチュアの論文を発表しても専門家からは無視される。だから研究成果は本として紹介しなければならなかった。それも歴史や考古学の世界で権威ある出版社でなければならなかった。しかしそんな願望を簡単に受け入れてくれる出版社があるはずがない。

失うもののない者の強さであった。とにかく迷わず第一希望の吉川弘文館に誰の紹介もなく草稿を送ってみた。

人生にはつきがある。編集者が高麗尺に疑問をもった経験のある方で、とにかく出版を検討してくれるという。吉川弘文館と言えば、専門の学者でさえそこで本を出せば勲章になる出版社であった。定説にもなっていないアマチュアの本など余程のことがなければ引き受けるはずがなかった。それが本にしてくれると言う。有名な歴史考古学者坂詰秀一先生が新聞書評でも取り上げてくれた。神仏の加護を再び感じた。

出版が終わってしまえば一段落と思っていたのが大間違いであった。背伸びをし過ぎてしまった。いたるところに美しい誤解が満ち満ちていた。そのことにはまず自分で気がつき次に読者が教えてくれた。自分ではこれしかないと思った論理も冷静になれば、別の見方もあった。使ったデータがミスプリントだった場合もあった。晴れがましい本を開くのが恐いと思う日もやって来

た。しかし基本的な間違いではない。何とかしてもっと自論を強化したい。世の中にはそんな資料が必ずあるはずだ。

またデータとの格闘がはじまった。突破口があるはずだ。それを求めて毎朝五時には起きだして机に向う日々が続いた。段々深みにはまり、朝鮮半島の中世から近世にかけての計量史や土地制度史の研究、それに中国の土地制度研究史にまで手をひろげるようになった。

その結果、生まれたのが、中国・朝鮮半島・日本にまたがる壮大な土地制度史の構想であった。主観的には個々の構想を繋ぎ合わせれば、自然に出来上がる構想であるが、他人に説明するには肝心の古韓尺がもっと直接的に検証されなければならないし、古韓尺による土地制度の証拠が見つからなければならない。そのミッシングリンクをいかにして探すか。それはかならず朝鮮半島にあるはずだ。韓国に行きたい。

そんな姿を見ていた妻が言ってくれた。……早く会社を卒業して、韓国に行っていらっしゃい……。この一言が決定的であった。

私たちには武という知的障害を背負った子がいる。この子が果たして、ひとりでバスに乗れるようになれる日が来るであろうか。それが、初めて異常に気づいた時の想いであった。その武が今では、社会福祉法人の工場でお給料を貰って働いている。ゆっくりではあるが確実に一歩づつ進んでいる。その進歩を見る度に、私たちふたりは喜び合ってきた。夫婦の気持ちがひとつになるのはいつも武のことであった。だから、その子を置いて韓国へ行くことなど願望にすぎなかっ

た。しかし武のためにも良いかも知れないと妻は言ってくれる。嬉しかった。

アマチュアとして研究していると、アマの良さ悪さが良く判ってくる。それと同時に何かとプロをけなしながらも、専門家の本当の凄さも判ってくる。だから、自分の学説を本気で専門家に認めさせるには強固な証拠を見つけるか、または専門家の内に入って同じ論理で発言して行くしかない。そのためには、日本でも韓国でもいいから大学院に入学するのは妙案である

……いやもっと妙案がある……大学の先生になってはどうか……もちろん、歴史や考古学の世界で、大學の先生になれるわけがない……あるとすれば金属工学の分野だが……。

たまたま博士論文の時に見出した理論は金属工学の分野ではちょっとした勲章となっていた。これに民間会社出身ということを逆手に取ってアプローチすればチャンスは十分にある。

そうこうする内に、平成十一年には会社卒業が現実のものとなった。しかも非常勤顧問と言う願ってもない待遇をしてくれると言う。いよいよ古韓尺学説の完成を目指して動ける環境が整った。

ところが現実は皮肉であった。もうひとつの趣味、金属考古学の研究が目前に大きく拡がってきたのである。会社卒業までは職業としての金属を表に出した活動は無意識の内にひかえていたが、制約がとれた途端、蓄積があっただけに、いきなり一軍入りしてしまい、引くに引けなくなってしまった。それだけに成果も面白いほど上がった。古韓尺の研究に比べれば、何をやっても論文に書ける気分であった。

そんなある日、韓国で講演をして欲しいという話がふたつ飛び込んできた。チャンス到来である。講師の略歴を送るようにとの連絡に、「待ってました」とばかりに送ったのが、私の特製履歴書である。

韓国語で書いたその履歴書には、巧みに自己宣伝を織り込んでおいた。韓国の歴史や考古学にあこがれを持つ日本人としても、金属工学の専門学者としても、高度成長期を生きぬいた企業人としても、どの点から見ても関心を持ってもらえるように作り上げた履歴書であった。あわせ技で一本というのがあるが、てらいもなくそれを狙ったものであった。

それが慶尚大学の日本文化研究所名誉教授姜東湖先生の目に留まり、金属工学科の許甫寧教授に手渡されたのが幸運であった。平成十三年の初めから韓国での生活が始まった。

韓国では早速古韓尺の研究を始めるつもりであった。しかし初めは、金属考古学分野を優先した。書くべきテーマがたまっていたし、折から韓国の慶州で開かれる金属考古学の世界会議にも論文を二件提出する予定があったからである。それも一ヶ月ほど前に終わった。その慶州がまた私の古韓尺研究に火をつけることになった。

『三国史記』や『三国遺事』の記載が古韓尺の文献的な証拠になるという確信には変わりがなかったが、尹武炳の朱雀大路説が否定されていたのは痛手であった。なんとか敗者復活の道はないかを模索し続けた。そして思い付いた。

『三国史記』の「王都、長三千七十五歩、廣三千十八歩」に出てくる七十五歩と十八歩は共に九の倍数になっているではないか。すなわち七十五歩は四百五十尺で五十尺の九倍、十八歩は二歩の九倍であり、それぞれが九本の道路幅を意味しているのではないか。それなら王京三千歩を一里（三百歩）ずつに区切った時に必要な九本の道路と一致する。古韓尺の五十尺は発掘遺構の大路十三・四メートルと完全に一致するし、二歩はその四分の一で小路の単位だ。

そう気がついた途端、全てが見えて来た。『三国遺事』にある「京中　三百六十坊　五十五里」の意味は京が三百六十坊と五十五里で成り立っているということだ。計量史を知らない学者は里を距離のことだと思っているから、さっぱり判らないだろうが、里が一里四方の面積を意味するのは常識であり、これは町が距離の単位であると同時に一町四方の面積を意味したのと同じことなのである。

そうであれば王京は方三千歩すなわち方十里であるから面積が百里である。だから王京の総面積百里の内五十五里が村落であり、残りの四十五里の内に三百六十坊が出来ていたことになる。後は簡単に、里の中に方百歩の坊が九つあったことが判る。すなわち三百六十坊は四十里分である。この四十里と五十五里を合わせると九十五里で残りの五里は王宮分に違いない。

そこまでの考察は一本道であった。この結果一坊すなわち百歩が百六十メートルとなり、その尺度は古韓尺と同じ二十六・七センチとの結論がでる。……うまくいった……うまくいった……もうこれで十分だ……。

……でも待てよ、それなら里と坊は王京のどの位置を占めていたのだろうか……確か『梁書新

羅傳』には王京の中心部に坊の部分があると書いてあったはずだ……それに『三国史記』には『三国遺事』とは異なって五十五里ではなく三十五里と書いていたではないか……。

これらの疑問が結局最終的に王京復元図に左右対称の美しい配置図をもたらすことになる。そのプロセスを紹介したいが煩わしすぎる。……とにかく美しい復元図だ……その上これらの復元図が従来の学者たちが道路遺構の観察や発掘調査から作っていた復元図に完全に一致するではないか……。また神仏の加護があった。

かくして古韓尺が文献的な証拠を得ると同時に中国・朝鮮半島・日本を結ぶ壮大な土地制度変遷史の神秘のミッシングリンクも見つかった。そして夢中になって論文を書き始めた。

……論文を書き上げない内に飛行機が落ちては絶対に困る……出来上がったらどこの学会誌に載せようか……急ぎたいが安売りもしたくない……それに中国・朝鮮半島・日本の壮大な土地制度変遷史も書かねばならない……土地制度変遷史は計量史ほどニッチな世界ではない……歴史学の根幹部分だ……大満足だ……大満足だ……妻に感謝する……。

崔致遠の碑文（平成十五年二月）

良港にはかならず島と山がある。釜山は島と山に取り囲まれた超過密都市である。その西側には、金井山から九徳山まで断続する南北の山脈が連なり、洛東江が釜山に流れ込むのを峻拒して

いる。一方、東側にも機帳から萇山に続く南北の山なみがあり、そのふたつの山脈にはさまれ細長く広がっているのが釜山の市街地である。

しかもその市街地にも、島のような小山が散在しているので、平坦な土地はほとんどない。だから四周の山々の中腹まで超高層アパート群が立ち並ぶことになる。

そんな釜山を地図も持たずに良く歩き、中心部はもうあらかた歩き尽くしてしまった。残るのはふたつの山脈の外側に広がる広域市街地である。

海雲台は釜山の中心地から東部にやや離れた萇山の南海岸にある名勝地である。昨年末のある日、思い立って釜山の海岸線を歩こうと、東萊のバスターミナルから歩き始めた。鉄道が見え隠れする幹線道路を二時間あまり歩くと海雲台に着く。韓国の鉄道は完全に時代から取り残されていて、めったに列車は通らない。いきなり自動車社会に突入してしまったからである。

かっての海雲台は海辺特有の飲食店街が雑然と立ち並び、その周りに屋台がひしめいていたように記憶しているが、今は完全に再開発され、周辺には大型の観光ホテルが林立している。ワールドカップに向けて整備したのであろうか、道路も広く、屋台等はテント村に集約されていて、国際観光地の風情である。

その海岸のはずれに、「釜山港へ帰れ」に唄われた冬栢島がある。もとは独立した島であったが、今は陸続きで、頂上に統一新羅末期の大学者崔致遠の銅像が建つ。

わが畏友、漢詩人の鯨游海氏との酒肴にでもなればと、周囲に記された崔致遠の漢詩を読もう

とするが歯が立たない。しかし事績についてはハングルなので何とか判る。

それによれば、崔致遠は十三歳で唐に入り、十八歳で科挙に合格、詩人として名を挙げ、役人として出世し、黄巣の乱では「討黄巣檄文」を書いて大功を挙げたという。まるで阿部仲麻呂のような経歴であるが、異なるのは二十九歳の時、故郷に錦を飾り、新羅の王朝に仕えたことである。

しかし当時の新羅は既に朽ち落ちる寸前であった。彼の意見に耳を傾けなかったばかりでなく、迫害さえ加えるありさまで、彼は結局すべてに絶望して伽耶山海印寺に引きこもってしまった。

冬栢島に崔致遠の銅像が残るのは、彼が伽耶山に入る途中、ここを通り風景の美しさに感動して、島の南端の岩に「海雲」と刻んだとのいわれによる。海雲は崔致遠の号のひとつである。

崔致遠の事績を読んでいる内に思った。菅原道真と全く同時代に生きているし、阿部仲麻呂よりも百年ほど後の人物であるが、経歴が実に良く似ている。これは『まんじ』のテーマになりそうだ。さっそく大学の図書館で調べてみようと。

それが私の研究に大幸運をもたらすことになった。崔致遠の記した「崇福寺碑文」に出会ったのである。そこには、大変なことが書かれていた。

……ついている……ついている……本当についている……。

人生にはつきがある。そしてつきを意識するとまた次のつきを呼びこむ。崔致遠の崇福寺碑文

に出会ったのも、そのつきの連鎖の一環にちがいない。

思うに、今度のつきの連鎖を辿って行くと、どうもすべてが初めての韓国旅行に行き着くようである。

妻と初めて韓国を訪れたのはもう十年以上も前になる。五十代半ばのサラリーマンしては最多忙な時期に、やっとの想いで纏め上げた「古韓尺」の研究結果が、幸運にも吉川弘文館から出版されることになった。それを機会に、文献だけで知る韓国の遺跡、特に慶州の皇龍寺址はぜひ見ておきたかった。五月の連休を利用してのあわただし小ツアー旅行、たしかひとり当たり二十万円以上かかったように記憶している。今思えば随分割高な旅行であったが、それが私たちで一緒に出かける初めての海外旅行であった。

世の中には不思議なことがたくさんある。この韓国旅行がそうであった。わずか六日間の日程に過ぎなかったのに、その時の出会いが古韓尺の研究にいつも不思議に絡んでくる。この海雲台の崔致遠もそうであった。とにかくすべての出来事が不思議な糸で結ばれ、私の研究を後押ししてくれている。

私は永年にわたって、古代の朝鮮半島と日本に共通する古韓尺と名づける二十六・七センチの尺度が存在していたことを主張し続けている。しかしそれは間接的な状況証拠の積み重ねによるものであり、直接的な証拠に乏しいため、無視し続けている学者も多い。

なんとか古韓尺の決定的な認証を得たい。その思いで、韓国にやってきた。

そして二年が経過した今日、崔致遠の崇福寺碑文に出会ったお蔭で当初の目的を二百パーセント達成した気分でいる。とにかくついていた。いやつき過ぎていた。出るはずのない牌を次々に引いてきて連続して九連宝灯で上がった気分である。

それがすべて最初の韓国旅行と関連しているように思えるのである。こんな具合である。

第一日目は公州や扶余の観光拠点となる儒城温泉に泊った。韓国最大のこの温泉地は、その翌年に開かれる大田科学万博の工事で殺気立っていて、道路を渡るにも決死の思いであった。そんな雑踏をさけながら、朝早く妻と散歩をしている内に、たまたま大学らしいところに行き当たった。それが百済文化研究の名門、国立忠南大学であった。もちろん大学の名前はよく知っていたが、宿のすぐ近くにあることなどまったく予期せぬことであった。……ああ、きっとこの大学に何か縁がある……。

そんなぼんやりとした予感がその後に次々と実現して行く。

まず忠南大学の百済研究所から古代製鉄技術についての講演の依頼が舞い込んできた。それは、韓国での生活を始めてから一年ほどたった一昨年末のことであった。会社を卒業してから書き始めた金属考古学関係の論文が目に留まったらしい。私の講演のために、一日の日程を準備してくれるという。

韓国の考古学や古代史の関係者と知り合う絶好な機会である。講演時間も十分にある。それな

らば古韓尺の研究についてもぜひ紹介したいと申し出たところ快く受入れてくれた。

企画者は私をたんに金属考古学の研究者としか知らなかったようであるが、講演会場には、古韓尺の研究を通じて知り合った関係者が多数やってきていた。その関係で、忠南大学の百済研究所との繋がりが深まり、昨年夏には論文「〈三国史記・遺事〉記事による新羅王京の復元と古韓尺を『百済研究』に載せてもらうことになった。

この論文が古韓尺研究の決定打になるだろうということは、私には良くわかっていた。とにかく十分過ぎるほどの手応えであった。これで永年の夢が百パーセント達成できる。それを『百済研究』に紹介できるのも、最初の韓国旅行の奇縁のように思える。

しかも、その論文の主舞台となった新羅王京すなわち慶州には第三日目に泊っている。奈良に似通う静かな古都で、その東側に念願の皇龍寺址がある。奈良東大寺をしのぐ巨大寺院で、その詳細な発掘調査結果が発表されたことによって、古韓尺説がどれほど強力な支持を得たか計り知れない。その皇龍寺址をぜひ見てみたいというのが、旅行の主目的であったが、もちろん観光コースには入っていない。

翌朝早くタクシーの運転手に皇龍寺址と告げて目的地に向かうが、場所が良く分からないらしい。世界的に有名な遺跡でさえ、観光名所でもなければ現地の人々は関心がないのであろう。それでもなんとか地図を頼りに広大な発掘現場に辿り着いた時には、もう太陽が昇り九重塔址の礎石群が朝露で光り輝やいていた。あこがれの地を踏むことができたという思いで、金堂址、講堂

址、回廊址、そして中門址とむやみに歩き回った記憶がある。

その皇龍寺址の発掘調査は今も続いていて、皇龍寺周辺の王京條坊の様子が次第に明らかにされ、従来から有力であった百六十メートル方格説がますます確実なものになって来ている。この方格地割と『三国史記』や『三国遺事』の記事を対照すれば、一方格が百歩であることが明らかであり、そこから一歩は百六十センチすなわち一尺は二十六・七センチと計算される。ここに古韓尺が待望の文献資料によって裏付けられることになったのである。

そして第四日目には釜山に入り海雲台に泊った。そこで出会ったのが、崔致遠の銅像である。崔致遠といっても、その当時は名前を知っている程度で、特に関心があった訳ではない。ただ新羅の歴史に登場する大学者に、朝の散歩で出会えたのが嬉しく、妻との会話も弾んだ。そしてその思い出が私を再び海雲台に向かわせ、崔致遠の崇福寺碑文に巡り合うきっかけとなったのである。日韓の古代土地制度を読み解く貴重な記録を発見する端緒であった。

日本では大化前代に代制という土地制度が行われていた。しかし、その起源については高麗尺によるとする学説が有力ではあったものの、疑問点を提出している学者も多く、いわば良く分かっていない状態であった。それが崔致遠の崇福寺碑を解析することによって、代制と朝鮮半島の結負制が完全に同じシステムであると明らかになったのである。そして、その基礎に古韓尺があったのはいうまでもない。それは日本と朝鮮半島の土地制度が同時に解明された瞬間でもあっ

た。

私はもともと前回の「新羅王京」の論文を書けたことで十分に満足していた。そのことによって、古韓尺が状況証拠ばかりではなく、文献的にも裏付けられ、学説としての確固たる基盤を築くことができたからである。

しかし、日本の代制と朝鮮半島の結負制が同じシステムにあったことが判明したことは、古韓尺の認知を求める立場を超えて、日本の古代史に大きな影響をもたらすはずである。大化の改新をめぐる歴史論争のひとつの焦点である代制から町段歩制への移行についても、新たな観点からの論議を呼ぶことであろう。

私は古韓尺の研究を進めるためには、朝鮮半島の土地制度史の研究が不可欠だと考えてきた。しかし朝鮮半島の土地制度については、高麗末期以降については、かなり詳細にわかっているが、高麗以前の制度については、むしろ日本よりも判っていなかった。

わかっていたことといえば、朝鮮半島では、土地の実面積を示す頃畝制と、同一収量を基準とする結負制が並行して行われており、新羅時代には結と頃の面積がほぼ同一であったことぐらいで、肝心の頃や結の実面積については諸説あるものの、まったく定見が得られていなかった。

それは、高麗時代の土地制度を記述した『高麗史』文宗量田法（一〇六九年）の記述に誤りがあり、その復元をめぐって諸説が提出されていたからである。

文宗量田法というのは、量田尺の三十三歩の方格すなわち千八十九平方歩を一結とする全く奇妙な制度であった。ただし、それが間違いでないことは、金石文の記録などから明らかにされていた。問題はそこに記載された量田尺がどんなものであったかである。そこにはこう書いてあった。

六寸為一分　十分為一尺　六尺為一歩

これをそのまま素直に読めば、基準尺の三十六尺が一歩になる。しかしそれではどんな基準尺を持ち出しても、一結の面積があまりにも広くなり過ぎて実状にあわない。

そのため多くの学者達は「十分為一尺」の、分か一か尺の部分に誤りがあると考えた。そうするといずれの場合でも結局は六尺で一歩になる。しかし六尺一歩なら通常の制度そのものであり注記を必要としないし、文章的にも冗長すぎる。その上、六尺一歩であれば、どんな基準尺を持ち出しても、同時代の宋人徐競が、宣和五年（一一二三年）に書いた『宣和奉使高麗図経』の記録に合致しない。

そのような状況から、高麗中期の結の面積でさえ定見が得られず、ましてや新羅時代の面積については、議論を深めることができなかった。

ところが私には私だけが知っている貴重な情報があった。古韓尺の研究を通じてである。

頃畝制とは古代中国の制度で方百歩すなわち一萬平方歩を一頃とする制であった。これを古韓尺で計算すると二万五千七百平米になる。一方、朝鮮時代前期の世宗代に定められた頃の面積も

二万五千七百平米で完全に一致するのである。しかも古韓尺の百歩を方格とする古代地割遺構は新羅王京をはじめとして、南原小京や尚州邑城にも残っているし、文献的にも方百歩をもって頃あるいは結と伝える事例がいくつもある。だから朝鮮半島では頃の面積は長い間変わらなかったのである。

この事実を知ると、見えるものが変わってくる。文宗量田法の錯誤は「十分為一尺」の部分ではなく最初の部分の「六寸為一分」にあったのではないか。そう気づけばあとは一本道である。六の部分が二、三、四、五のいずれかの誤りであったとするならば、文章としての意味も十分に通る。

これを徐競の記録に照らしてみれば、周尺を基準として

四寸為一分　十分為一尺　六尺為一歩

と読むのが最も合理的である。すなわち量田法の一歩は周尺の二十四尺になる。ところで周尺の八尺が一歩であるから、二十四尺は通常の歩で云えば三歩のことである。しかも周尺の一歩と古韓尺の一歩は実長が等しいから、文宗量田法を古韓尺の歩で示せば、三歩×三十三すなわち方九十九歩になる。何の事はない結は方百歩のことなのである。

しかしそれならばなぜ量田尺による方三十三歩などというややこしい制度を持ち出す必要があったのであろうか。この疑問を解く鍵が崔致遠の崇福寺碑文の中にあったのである。そこにはこのように書いてあった。

東俗　以五畝減石弓為結

これは、東俗（新羅）では方百弓すなわち一万平方歩の面積から五畝すなわち千二百平方歩の面積を差し引いたものが結であると解説した文章である。計算して見れば八千八百平方歩が結の面積になる。しかしこれは頃や結の面積を方百歩すなわち一万平方歩としていたことと異なるではないか。結と頃の面積が等しかったとする定説に誤りがあるのであろうか。

そこで重大なことに気がついた。もともとは、結は頃と同じ一万平方歩ではなく、九千平方歩すなわち〇・九頃だったのではないか。なぜならば、面積の里は九頃であり、十結が一里であったとすれば、結が〇・九頃と簡単に導き出せるからである。もともとは結と頃は異なった単位だったのではないか

そう気がつくとすべてが見えてきた。三国時代に、百済では結負制が行われ、新羅では頃畝制が行われていたのではないか。結は百負、一負は十束であるから、基本単位の束は九平方歩すなわち方三歩になる。だからこそ、三歩を量田歩にすればその一平方歩が束であり計算が容易になる。ここになぜ三歩を量田歩とする奇妙な制度が始まった理由があるに違いない。

しかも統一新羅の時代になると、当然のこととして、新羅、百済、高句麗の土地制度がバラバラであっては不便である。そこで結を頃に合わせてしまったのではないか。そうであれば、方三十三歩すなわち千八十九平方歩を一結とする制度がなぜ始まったかについても明快な説明を与えることができる。

すべてがひとつに収斂した。美的とも云うべき結果である。煩わしいのでいちいち示さなかっ

たが、この分野の研究者達を納得させるための傍証も豊富にある。心が躍る。これで高麗時代以前の土地制度研究が大きく進展するし、古韓尺も万全になる。

しかし本当に喜ぶのはその後の結論を導いた時であった。百済の結負制の面積を計算してみると、その一結は二万三千百平米であり、一束は二十三・一平米である。一方、大化前代に日本で行われていた代制ではその五百束代が後の一町歩であり、そこから一束代を計算すれば、二十三・一平米になるではないか。日本と朝鮮半島の土地基本単位が名称も面積も完全に一致している。しかも束の下位単位の把も共通である。こんなことが偶然に起こるはずがない。日本の代制は百済の結負制に源があるに違いない。

今までの学者達は代制の起源を高麗尺に求めていた。しかし実際は古韓尺による結負制に起源があった。

……勝った、勝った、勝った……完勝だ……。

……みんなで渡れば怖くない……。

みんな高麗尺に乗っかって大合唱をしていた。誰かが、ある遺跡について高麗尺で設計されたと報告すると、詳細な検討もなく次の研究者はそれを引用する。みんなが引用するから、おそらく正しいのだろうと次の研究者もまた引用する。それに異を唱える者には冷笑を浴びせる。

誰かが言っていた。軍隊と研究は多数決がなじまないと。私も想う。研究は最も高尚な遊びだと。いうなればアルバイトをしながら、売れない小説や絵画を書いているようなところに研究の醍醐味がある。だから職業的な。研究者は自戒すべきだ。本来は高尚な遊びなのだから、研究費

も自弁すべきものなのに、給与さえ貰っていると。それがアマチュアの研究に冷笑を浴びせるとは何事かと。

いつか職業的な研究者に向かって、こんな文章を書いて見たいと思っていた。しかしよほど幸運に恵まれないかぎり、それが現実になるとは思ってもいなかった。とにかくついていた。

そして学んだ。とりとめもない偶然の出来事に心が弾む時、つきが生まれ、つきがつきを呼ぶことを。山歩きの知人に、成田空港でばったり出会ったりする。東欧旅行で一緒だった方を、ナイル河のクルーズ船上に見つけたりする。どうしても見つからなかった資料を、たまたま手にした本の裏表紙に発見したりする。そんな時には心が弾む。そして偶然の出来事を楽しんでいるとまた次の偶然がやってくる。それがつきだ。

崔致遠の崇福寺碑文がもたらした成果については、「結負制の復元と代制の起源」と題して一気に論文として書き上げた。いまそれを韓国語に翻訳している最中である。願望としては、日本と韓国で同時に発表したいが、プライオリティを優先する学術誌にあっては、それは許されまい。さあ、どうしようか。

いずれにしてもまた来週にでも釜山の海雲台を訪れてみよう。まだまだつきが続くような気がしている。これを逃してなるものか。